

大宮売神社周辺遺跡群少考

伊野近富

1. はじめに

大宮売神社周辺遺跡群とは、京都府中郡大宮町^{すき}周^{おみやめ}に所在する大宮売神社の周辺にある多数の遺跡を総称したもので、本稿で名付けたものである。

大宮売神社は、かつて丹後二の宮といわれ、古くは延喜式にもその名が見えるのである。しかし、この式内社として以外に、延喜式の中では平安時代に宮中で祭られる八つの神の中に入りており、丹後にある1神社が、なぜそうなのかについては文献学による^(注1)研究はあるものの、考古学による研究は未だないのである。

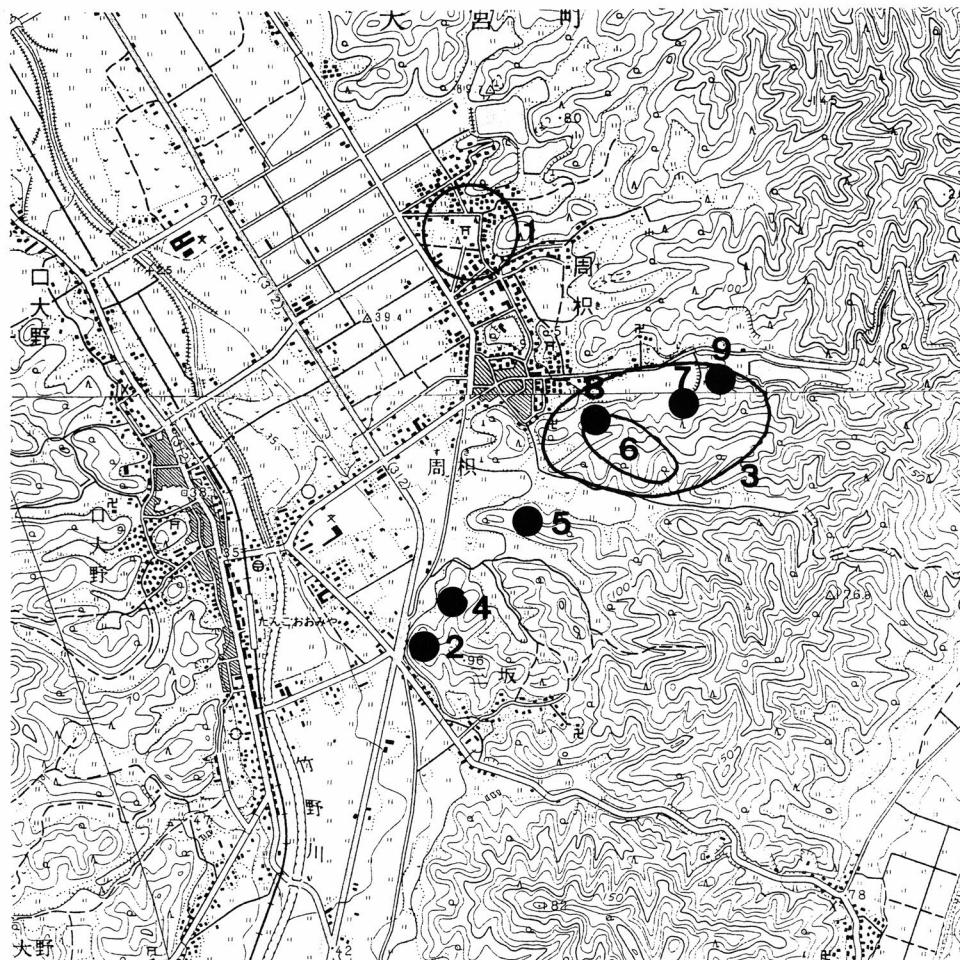
本稿は、大宮売神社の周辺で形成された遺跡群について考察し、いわば外堀を埋める形で、本丸である大宮売神社について考えようという内容である。

2. 大宮売神社とその周辺

丹後半島の、その北端は日本海に突き出ているわけであるが、その南端は丹波地域に接し、さらには京都へと続いている。古代から畿内中心部と日本海、さらには海外とのつながりを考える上で、重要な半島である。その中央部には竹野川があり、遺跡を辿ってみると、弥生時代前期以来の大集落である丹後町竹野遺跡、古墳時代前期の巨大古墳である神明山古墳がある。河口から10km遡ると、弥生時代中期の玉作り遺跡である奈具岡遺跡や、陶質土器もしくはその影響を受けた初期須恵器が出土した古墳時代の奈具岡北1号墳などがある。また、大田南5号墳では青龍三年銘鏡が出土した。これは西暦235年にあたる中国の年号で日本で出土したもっとも古い紀年銘鏡である。

さらに遡ると、弥生時代前期の環濠集落で名高い峰山町扇谷遺跡があり、そして、大宮売神社へと至る。

大宮売神社は長さ5km・幅1.5kmの細長い平野の東端にある。背後には比高差20～30mの丘陵が東から西へと張り出しており、その丘陵上でいくつもの遺跡が確認されている。平野の中央やや西よりには竹野川が流れている。川の西側には東側に比べてあまり遺跡は確認されておらず、東側に集中している。ただし、盆地の南部では東西とも遺跡は集中して



第1図 主要遺跡分布図(番号は本文と同じ)

いる。竹野川は周枳の南端で大きく西に流れを変えている。ここに山塊があるからで、このため、領域の南限となっている。

3. 大宮売神社周辺遺跡群の概要

大宮売神社周辺には10以上の遺跡が確認されている。いずれも神社より南方である。時期は弥生時代から中世に及ぶ。

では、中心地である大宮売神社境内の遺跡の概要について触れ、次いで周辺遺跡群について述べる。

①大宮売神社境内遺跡

大正十二年の梅原末治氏の^(注2)報告によれば、多数の遺物が境内より出土し、神社が保管しているとのことで、そのいくつかを紹介している。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代

にかけてのものが多い。特に石製模造品には勾玉や有孔円板などがある。また、土製模造品には壺などが多い。小型丸底壺や高坏もみられ、基本的には祭祀に関係する遺物群と見て良い。この見解は、既に梅原氏が出されている。なお、吉村正親氏^(注3)が、この保管遺物を実測し、公表している。

②三坂神社墳墓群

遺跡は大宮町の盆地が急速にすぼまる地にある。すなわち、一つの領域の南限の地にあるといえる。

さて、三坂神社墳墓群は、平成4年に調査されたのだが、当初は古墳群として考えられていたが、調査が進展するにつれて、6基の弥生時代後期の台状墓から成る墳墓群であることがあきらかとなった。埋葬主体は39基で、そこに3000点余の玉類をはじめ、69点の供献土器が出土した。最高所にある3号墓の規模は、南北約15m・東西約15mの方形である。ここでは、玉類のほか舶載の素環頭鉄刀と鈍、弓矢が検出された。

③左坂墳墓群

左坂墳墓群は標高約90mの丘陵上に密集する弥生時代後期の墳墓群である。現在19基ほどが調査されており、埋葬施設は149基以上である。ここでは素環頭鉄刀の他、6000点以上の玉類が出土している。

前述したとおり、左坂の丘陵には古墳時代にも墓が築造されており、弥生時代後期以降、連綿と造墓活動があったことが知られる。その数は140基以上である。特に、C21号墳では仿製振文鏡や、有肩袋状鉄斧や豎櫛が検出され、古墳時代前期の大宮町における中心的な墓であったことが知られる。また、B2号墳では箱形石棺という丹後の内陸部では珍しい埋葬施設も検出されている。

④有明横穴群

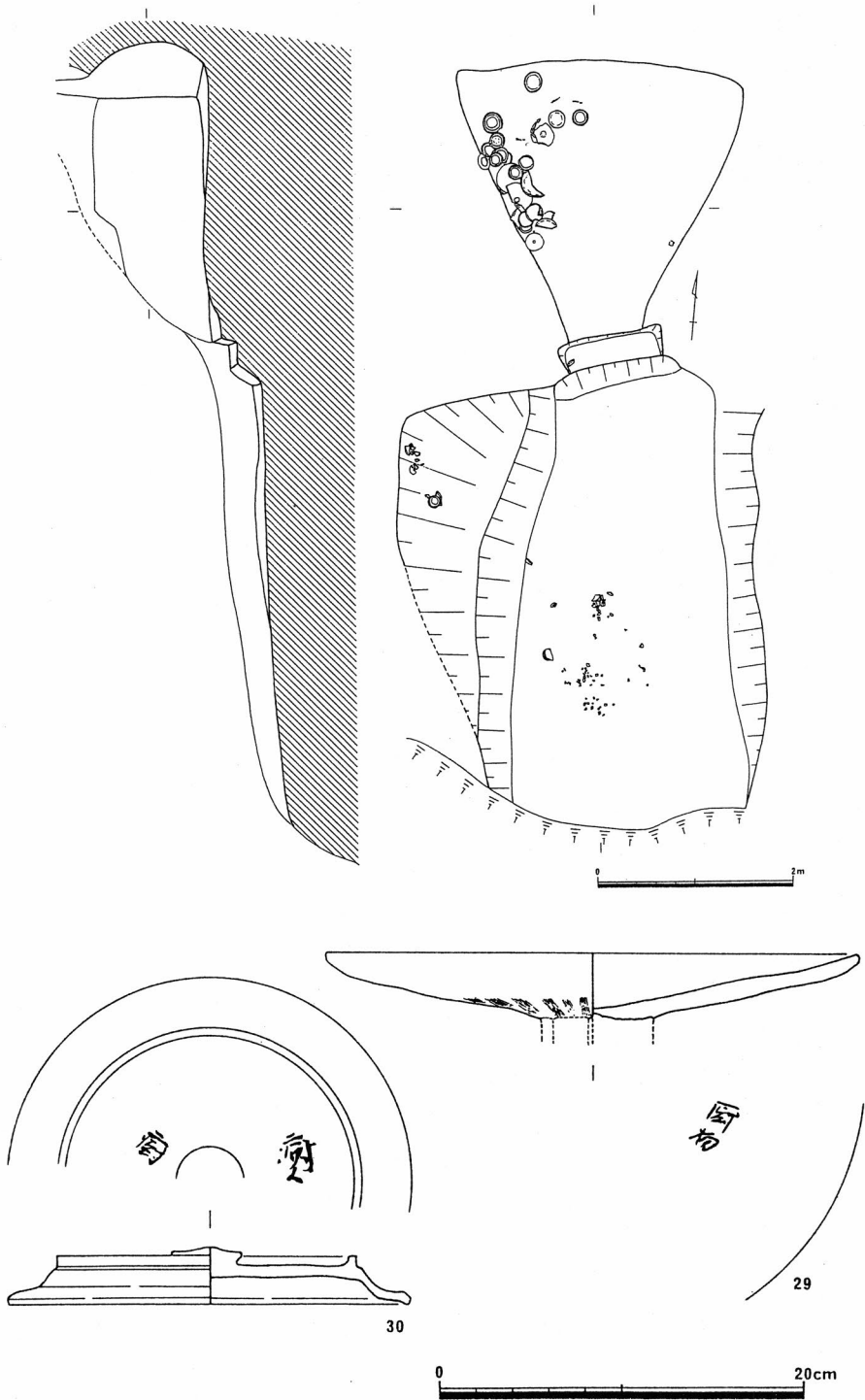
前述した三坂神社墳墓群に近接した8基の横穴群である。このうち、3基が調査されている。出土遺物から飛鳥時代から奈良時代にかけてで、実年代では7世紀中葉から8世紀前半に築造されたと考えられる。

5号横穴玄室内からは「奉」と焼成後に線刻された須恵器坏B、坏蓋をあわせて4点出土している。時期は7世紀第4四半期を前後する頃である。

⑤大田鼻横穴群

この横穴群は南面する丘陵斜面に築かれている。総数30基で構成され、京都府内最大級の横穴群である。発掘調査によって約300点の出土遺物が得られ、築造時期が判明している。それによると、6世紀末ないし7世紀初頭から8世紀中頃までである。

築造された地点や標高に注目すれば、1～9号のI群(調査報告による、以下同じ)、10



第2図 大田鼻28号横穴の遺構と遺物(注7文献による)

～19号のⅡ群、20～27号のⅢ群・Ⅳ群がまとまりとして把握でき、28・29・30号はそれぞれ単独として把握できる。特に、28号横穴の周辺30m以内に横穴は認められず、この横穴が特異な存在であったことが知られる。平面形はB型として分類されている。これは長方形の前庭部に、奥に広がる台形の玄室を備えたものである。調査成果によれば、当横穴群中最も新しいのである。土師器高坏(29)の坏部外側に「厨物」と墨書されている。もう1点28も判読しにくい「厨物」と考えられる。蓋は扁平な天井部の中央に擬宝珠つまみを持つもので、この外面に「厨」「厨人」の2種が墨書されている。

この墨書の「厨」の意は、10世紀の宇津保物語などによると、飲食物を調理する所や料理人であり、「厨」の墨書土器を出土した遺跡は奈良～平安時代前期の官衙関係が多い。後年の「御厨」は天皇家、伊勢神宮、上下加茂社や撰関家などに供御、供際物、食料として魚介類その他を貢進する所領を指すこととなった。史料上の初見は、延暦十九年(800)五月の太政官符『類聚三代格』にみえる近江国筑摩御厨で、これは平城宮出土木簡に筑摩より醬鮓を貢進した付札にみられるように、大膳式の下での贄貢進体制に系譜を引くものと理解されている。

⑥左坂横穴群・里ヶ谷横穴群

現在調査されているのは22基である。^(注9)このうち、里ヶ谷横穴群は5基調査されており、さらに1基が確認されている。平面形態は筒井崇史氏によればⅠ類と分類されており、玄室のこれらの横穴群の平面形に注目すれば玄室がフラスコ形(Ⅱ類)が22基中9基であり、大田鼻横穴群では(B型)30基中21基であり、大宮町内で主流な形態である。時期は飛鳥ⅢないしⅣ期段階から平城Ⅱ期段階にかけて築造されたもので、「厨」と墨書された土師器が出土したのも、このタイプの横穴であることを、ここで確認しておきたい。

⑦幾坂遺跡B地点

左坂古墳群のある丘陵の中央北面の谷部にある遺跡である。^(注10)遺構は堅穴住居が3基以上が確認されている。出土遺物として須恵器・土師器の他、土馬・ミニチュア土器・竈形土製品が出土した。これらの年代観は6世紀後半から7世紀後半にかけてのものであるが、中心は7世紀中葉から後半にかけてである。

土馬は祈雨や水霊信仰に関するものとの見解が有るが、ミニチュア土器ともあわせて、この地で何らかの祭祀が行われていたことは疑いない。

⑧左坂経塚

左坂古墳群B1・2号墳の発掘調査で3基の経塚が確認されている。^(注11)いずれも土師製筒形容器で、1基は銅製経筒があった。なお、銅製の双鳥鏡も1点出土している。時期は平安時代後期から鎌倉時代にかけてと考えられる。

⑨幾坂城跡

幾坂城跡は、左坂古墳群F支群の^(注12)一画にある。古墳群の中では最も東に位置している。この城は、文献にまったく見られない城で、わずかに地元自治会に所蔵される地図類に、調査地の隣接地が小字「シロノコシ」と記されているという。

遺構としては、3か所ほどの平坦地があり、曲輪跡と考えられている。後背には堀切があり、幅5m・深さ3.5mもある立派なものである。出土遺物は土師器皿・摺り鉢・鍋、陶器甕、瓦質鉢・香炉、青磁椀、灰釉陶器皿、茶臼、砥石、石仏、北宋銭などがある。16世紀に中心があるようである。

⑩大宮売神社

大宮売神社は、^(注13)間人街道と呼ばれる主要道のそばにある。神社の草創期は不詳だが「新抄格勅符抄」に「大宮咩神七戸丹波」とあり、『三代実録』貞観元年(859)正月二七日条の諸神・進階を記す記事に「丹後国従五位下大川神、大宮売神従五位上」とある。

平安時代の『八条院領目録(1)』安元2年(1176)条や、鎌倉時代の随心院文書などに、「丹後周枳宮」の記事がある。これによれば、弘誓院(跡地は現京都市南区)に施入されている。現在、京都国立博物館に所蔵されている磬には承安4年(1174)の年紀と「周枳宮」の陽鑄銘がある。また、重要文化財に指定されている石灯籠は、本殿の両脇にあるが、一基に「徳治二年(1307)」の年号が刻まれている。本殿は丹後大震災により昭和5年に新しく造営されたもので、丹後半島では珍しい隅木入春日造であるという。

「丹後国田数帳」によれば、中世周枳郷64町4段250歩のうち、約半分にあたる30町5段10歩が大宮売神社の神領であったことが知られる。また、平安時代後期を下らないとされる像が二体あり、さらに鎌倉時代を下らないという「正式位大宮売大明神 従一位若宮売大明神」と併記した古額があって、一説に小野道風の真跡と伝えるが、大名神という名称は承久四年(1222)の太政官牒に「壺所字周枳社在丹後国丹波郡大宮部大名神」とあり、10世紀前半の『延喜式』には「明神大」と書かれており、平安時代後期以降に周枳庄が小野門跡の相続となった際に、誤って伝えられたのではないかと想像する。

4. ^{おみやひめ}大宮売神についての文献学による考察

和田 萃氏は^(注14)亀岡市史の中で、大宮売神について考察されている。それによれば、平安時代の延喜式には、神祇官の西院にいる神二三座のうち、宮中八神と称される神々がまし、その内に大宮売神や御食津神がみえていたとした。大宮売神については、忌部氏の伝承がまず注目されるとし、大同二年(807)に成った齋部広成の『古語拾遺』では、大宮売神を忌部氏の祖である天太玉命の子とし、天照大神の御前に奉仕する神としている。その奉仕の

内容は、内侍の善言・美詞をもって、君と臣との間を和らげて、宸襟を悦懌びしむることとしている。

二宮正彦氏によれば、貞観元年(859)二月に従五位上を奉授された内容は、大宮売神・御食津神・事代主神は斎女・供御・言辞の神霊で天皇奉護の日常生活に不可欠な神々であり、神祇官西院で奉斎される二三座の諸神の配列は、天皇個人より国土全体に波及する壮大な神霊を、内から外へ段階的に表現したものであるとした。

なお、和田氏は丹後の大宮売神が勧請されて宮廷祭祀に組み込まれた背景として、竹野川流域を支配する丹後大県主出身のヒバスヒメがイクメイリヒコ(垂仁)の太后となり、オシロワケ(景行)を生んだこと、丹波国造家から倭王権の大王に采女を貢進することが恒例であったこと等があげられるとした。すなわち、大宮売神は竹野川上流域で祭られていた女神であり、太后ヒバスヒメの伝承と結びついて、宮廷で大王に奉仕する女性たちの守護神として祭られるようになったと推測されている。

5. まとめ

大宮売神社及びそれに近い所に経塚を含めた祭祀遺跡があり、周辺に多数の墓群が形成される。時期的にみれば、弥生時代後期から、この地では一大墳墓群が形成された。これをもとに王国があったかどうかはわからないが、少なくとも有力な集団がいて、一定の葬送儀礼のもとに活動を行っていたことは確かである。魏志倭人伝にいう三〇余国と同様な国が形成されていたとしても不自然ではない。

古墳時代前半期も、多数の墓が形成される。中期以降その数は減少するが、後期末になり、横穴墓が出現するや、かつてと同様に一大墓群が形成される。この横穴墓の最終段階である奈良時代には、中央に贅を貢納する集団がいたことは「厨」等の墨書土器資料によって疑いないことである。この事実が、後年宮中八神の一つの御巫の祭る大宮女神として、延喜式にみえることにつながったと考えたい。

これは、直接的な契機であるが、その精神的なつながりは、和田氏のいうように古墳時代に遡る可能性があるのであるが、現在の考古資料でそれを決定づけるものはない。

中世を通して大宮売神社を中心とする周積の地が富裕の地であったことは、文献にも知られるところであるが、考古資料によっても徐々に明らかになりつつある。また、その始まりが弥生時代後期であることが、近年の発掘成果によって明らかとなったのである。

残念ながら、今回は集落遺跡の事例がなく、部分的な検討しかできないが、今後このような微視的研究を通して、古代史の一端を解明できることを念願しつつ、ひとまず筆をおきたい。

(いの・ちかとも＝当センター調査第1課企画係長)

- 注1 和田 萃「第3章第4節丹波と倭王権」(『亀岡市史』本文編第1巻) 1995
- 注2 梅原末治「中郡 第22 大宮賣神社」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第五冊 京都府) 大正12年
- 注3 吉村正親「丹後大宮売神社遺跡の性格について」(『太宰府陶磁器研究』)1995
- 注4 今田昇一・肥後弘幸他『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』(『京都府大宮町文化財調査報告書』第14集 大宮町教育委員会) 1998
- 注5 竹原一彦・石崎善久・村田和弘「左坂墳墓群・左坂横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第71冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 石崎善久「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第89冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注6 注4文献に同じ
- 注7 岡田晃治他「大田鼻横穴群」(『国営農地開発事業関係遺跡 昭和61年度発掘調査概要報告』京都府教育委員会) 1987
- 注8 「御厨」『国史大辞典』(吉川弘文館) 1992
- 注9 筒井崇史「大宮町左坂横穴群の検討」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- この他、森 正「丹後地域横穴墓の変質と終焉—律令期地域支配の一側面—」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 岡林峰夫「丹後の横穴」(『太邇波考古』第12号 両丹考古学研究会) 2000を参照
- 注10 橋本勝行「左坂古墳群・幾坂経塚・幾坂城跡発掘調査概報」(『京都府大宮町文化財調査報告書』第12集 大宮町教育委員会) 1998
- 注11 注5石崎文献および石崎義久「大宮町左坂古墳群の経塚状遺構」(『京都府埋蔵文化財情報』(第76号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
- 注12 注10文献に同じ
- 注13 『京都府の地名』(平凡社) 1981
- 『大宮町の文化財』(京都府大宮町教育委員会) 1988
- 注14 注1文献に同じ